大和物語『姨捨』確認テスト　解答・解説

■ 解答・解説

問1 この女性は、嫁にとっては夫（男）の伯母にあたるので「姑（夫の親代わりの年長の女性）」として描かれ、男にとっては亡き親の姉妹である「をば（伯母）」にあたるため。一人の老女が、立場の違いによって異なる呼び名で呼ばれている。

問2 ア（うっとうしい・つらい）。「憂し」は、わずらわしくいやだ、つらい、の意。ここでは、姑と暮らすことを嫁が「いやだ」と感じている。

問3 反復（継続）。同じ動作のくり返しを表す接続助詞「つつ」で、「（何度も）憎みながら」の意。

問4 性質が悪い・意地が悪いこと。「さがなし」は「性無し」で、たちが悪い、口が悪い、の意。

問5 (1) 嫁（男の妻）。 (2) 尊敬。「たうぶ（給ぶ）」は「与ふ」の尊敬語で、ここでは補助動詞として「〜てくれ」と相手（夫）の動作を高めている。嫁が夫に対して「（伯母を）山に捨ててくださいよ」と迫る場面。

問6 (1) （嫁に）責められて困りはてて。 (2) 受身。「責められ」の「れ」は助動詞「る」の連用形で、ここでは受身の意味。（「わぶ」は、つらく思う・困りきる意。）

問7 伝聞の助動詞「なり」（連体形）。「お寺で尊い法事をするそうだ」と、人づてに聞いた内容を表す。終止形に接続している点に注目する。

問8 (1) 伯母（嫗）への敬意。 (2) 謙譲語。「見せたてまつらむ」は「見せ申し上げよう」で、「たてまつる」は動作の受け手（見せられる相手＝伯母）を高める謙譲の補助動詞。

問9 (1) 受身。 (2) （年老いた）伯母（嫗）が、男に背負われた。月の明るい夜、男が「お寺の尊い法会を見せよう」と誘い、伯母は喜んで背負われたのである。

問10 イ（可能）。「下り来べくもあらぬに」は「下りて来ることもできそうにない（ような所に）」の意で、打消を伴って不可能を表す。

問11 (1) 返事もしないで。 (2) 打消の接続。「で」は「〜ないで・〜せずに」の意の接続助詞。（「いらへ」は返事の意。）

問12 男（信濃の国の更級に住む男）。長年、親のように伯母を養ってきたのは男である。

問13 腹を立てて山に捨ててはきたものの、長年、親のように世話をして一緒に暮らしてきた伯母であるため、いざ置き去りにすると、その情愛が思い起こされて、たまらなく悲しく感じられたから。

問14 (1) （更級の姨捨山に照る月を見ても）私の心は慰めることができなかったよ。更級の、その姨捨山に照る月を見て。 (2) 「〜できない」。「かぬ」は動詞の連用形について、「〜しようとしてもできない」という不可能の意を表す。 (3) 伯母を山に捨ててしまった後悔と、月を見ても晴れない深い悲しみ。

問15 ける。係助詞「なむ」を受けて、文末が連体形「ける」で結ばれている（係り結び）。

問16 (1) ぬ。 (2) 完了。「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形で、「(迎えに行って）連れて来てしまった」と、動作が完了したことを表す。

問17 この出来事があってから後、その山を「姨捨山」と呼ぶようになった、という、地名「姨捨山」の由来を説明した一文である。

問18 (1) 命令形。 (2) 尊敬。四段動詞「給ふ」の命令形で、「いらっしゃい」と相手（伯母）を敬う尊敬語。

問19 嫁が、年老いて腰の曲がった伯母を疎ましく思い、「年老いた伯母を深い山に背負って行って捨ててきてください」と、よくないことを言い続けて夫を責め立てたこと。その責めに耐えかねて、男は捨てる決心をした。

問20 (1) 平安時代（中期)。 (2) 歌物語。 (3) 『伊勢物語』(『平中物語』も可)。